

安部磯雄と消費組合(二)

仲尾



宏

一

安部は三十二年五月、学生時代からの親友岸本能武太の熱心なすすめにより、母校同志社を辞し、東京専門学校(のちの早稲田大学)に職を奉ずることとなった。これからのち、安部は教職のかたわら、社会主義協会の会長としての活動をつづけ、また平民新聞の創立とともに平民社同人として、その常時寄稿者となり、明治三十四年にはわが国初の社会主義政党たらんとした社会民主党を結成しようとしてその「宣言」をみずから執筆するなど社会主義者としての活発な活動をくりひろげた。また他方でこの時期に彼はもはや畢生の課題となった社会問題に対する見解を体系的にまとめようとした。

明治三十四年に公刊された『社会問題解釈

法』は安部流の各種の社会問題に対する処方箋であるとともに、当時、勃興期にあった社会主義運動において、たんなる社会主義思想の紹介にとどまらず、具体的な社会問題解決の方法を論じた点で画期的な著作であった。

安部はこの書のなかで「平等は天地の法則にして殊に人類社会に於て然りとす」見地から社会問題——すなわち貧困問題を社会の病氣とみ、社会問題一般の研究より社会問題解釈法(解決法)の研究に入らねばならないとした。そしてこの社会問題の根本的改革について「社会の病理学にして、大々の治療を施さんとするにある社会主義によらざるを得ず」としながら、慈善事業・教育事業、国家的事業とともに自助的事業の必要なることを強調した。安部によれば自助的事業とは「労働者が自主独立の精神に基き企図したる所の

事業にして其目的の遠大にして効力の懸著なる点に於ては到底、慈善事業や教育事業の企て及ぶ所にあらざるなり、唯自助的の事業は幾分か、金力と智力を具へたる者にのみ望み得べき事なるが故に目下飢餓の苦端に陥り或いは全く無智蒙昧の有様に在る者に適用せざるは明かなり」とするものであった。そしてその自助的事業の一環として消費組合をあげ、その意義についてくわしくのべている。

すなわち、「消費組合とは若干の労働者が団結して売店を設け、卸売店より日用の物品を購入し、通常の価を以てこれを会員に売却し斯くて其純利金を購買者の買高にに応じて分配するをいふ。生産組合は生産者に利益を与へ消費組合は消費者に利益を与ふるものにして両者は何れも協同主義てふ根源より生じ来るものなり。……」(同書二一九頁)

つづいて安部は一八九〇年頃の英国における消費組合の概況を報じ、ロバート・オーエンのニューラナークにおける事業を紹介、ついで初の協同組合の原則を確立したとされるロッチデール公正開拓者組合の先駆的運動の経過と抱負を事こまかにのべ、さらに消費組合の第二段階として「卸売会社」の現況とその意義を説いている。そして消費組合のもたらす功績の一つとして「ロッチデール労働者の変化を以て特にこれを消費組合の功に帰するは或は其当を得ざるやも計り難しと雖もこれが為め、労働者が大なる利益を受けるは決して疑ふべからざるの事なりとす、吾人は自助的事業が単に労働者を物質的に救済するのみならず、大なる教育的感化を有すること信ぜりと欲するなり」と結んでいる。

二

日本に消費組合の企てが初めておこなわれたのは既に明治初年のことである、ロッチデール消費組合のことも高橋昌、横井時敬共著の『信用組合論』（明治二十四年十二月刊）いらいはいはその概略を紹介されてはきた。しかしその正確な位置づけ、とくに労働者階級

にとつてこそ消費組合が必要であること、そしてその運営方法はあくまでロッチデールの労働者がこころみたように原則的、かつ合理的なものでなくてはならないこと。また消費組合の運動もまた広い意味での社会変革の運動の環であることを説いた点で大きな意義をもっている。

ちょうどその頃、片山潜は雑誌『労働世界』によつて、「共働店」設立運動を展開していた。しかしその運動は母胎たる鉄工組合、日鉄矯正会などの労働組合との関係が不明であつたこと、そして三十三年の治安警察法の制定によるそれらの労働組合運動の衰退とともに各地の共働店も消滅していったが、その壊滅の一因として石川三四郎が指摘するように「現金主義」などの原則をまもりとおせなかつたこともあつたようである。その意味で安部の著作における消費組合の運営方法についての厳正なとりあげかたは共働店運動失敗直後の情勢にあつて専門の一針たる役割を果たしたともいえる。

また、安部は留学中にさまざまな社会事業や社会運動にかんする文献を渉猟したと思われる。そればかりでなく社会事業には並々

らぬ関心をもつて視察してまわつたとしてゐるから、そのおりにイギリスなどにおける消費組合の活動ぶりも実際に見聞したかもしれない。従つて消費組合の紹介の仕方もある人のそれのように文献のみにたよつたものではなく、きわめて実践的な内容をもつたものであつた。

安部の『社会問題解釈法』はまた彼にとつて同志社在学時いらいの「宗教」と「社会問題」の二大テーマのうち、少なくとも「社会問題」について彼の見解をほぼ体系的にまとめたものであり、社会主義運動（社会変革の運動）と社会改良運動との関連もそれなりに明確にされている。そしてこの「解釈法」は発刊されるや幸徳秋水の『社会主義神髓』とならび称されるほど社会主義に関心をよせる多くの読者をひきつけたとされている。

安部はまた明治三十三年のはじめごろより片山潜、浮田和民、村井知至、永山栄次らとともに「共同家屋建築会」設立の運動にも加つた。今日の住宅生活協同組合の嚆矢である。これは労働組合期成会の人々が中心になつてその実現に奔走したが遂に実現にまで至らなかつた。

三

明治三十六年十一月、社会主義思想の宣伝・普及を目的として「自由・平等・博愛」をスローガンとした平民社が堺枯川、幸徳秋水を中心に起こされ、機関紙『平民新聞』が発行された。安部は木下尚江とともに同人としてこれに参加し、毎号のごとく平民新聞紙上に健筆をふるって社会主義の理論、思想の紹介につとめた。平民新聞はまた消費組合の宣伝普及にも大いに力を注ぎ、たびたび消費組合の有益なることをのべる記事が掲載された。

三十七年に入ると平民社は社会主義宣伝パンフレット『平民文庫』の発刊をくだてた。

そして幸徳の「孔孟と社会主義」、西川光次郎の「ストライキの話」、堺の「日本歴史と社会主義」などとならんで、旭山・石川三四郎が「消費組合之話」を書くこととなった。

石川はその序文でその間の経緯を次のようにのべている。「……平民社で著述出版を計画したとき、予に『消費組合』を割当てて呉れたのは枯川兄である。兄は更に之を安部磯雄氏に譲じ、安部氏は有益なる参考書を送り賜ふた……」このとき安部が石川におくった有

益なる書物とはホリヨークの『ロッチデール先駆者の歴史』であつたらしい。そこで石川は勇躍、「消費組合（一名、購買組合）之話」をまとめ、さらに平民新聞紙上にも「時局と消費組合」（第二十二号・明治三十七年五月十五日）という小論文を書いた。これらの石川の著作における消費組合はロッチデールの先駆者の運動に範をとり、後年の無産者消費組合運動のように階級闘争至上主義によらない消費組合、すなわち「消費組合は労働者・小作人諸君団結の第一手段」という改良闘争の組織として位置づけている。平民社に集る人々のなかで安部にしろ、石川にしろ、あるいは片山潜にしろ、いずれもキリスト教の人道主義から出発して社会主義に接近した人々が、いずれも消費組合の普及に熱心であつたことは興味ぶかい。

しかし、安部や石川のよびかけや、平民新聞紙上をつうじての再三の啓蒙にもかかわらず、実際の消費組合づくりはほとんどみるべきものをもたなかった。そのなかで比較的是っきりと記録に残っているものに平民社の同人の一人、加藤時次郎が彼の主宰する直行団の事業としてはじめた直行団消費組合があ

る。この直行団消費組合には石川三四郎も監事として加わり、加藤を助けたが当初のほうはなしい宣伝広告にもかかわらず、組合員は百名にみたず、細々と米の取扱いをつづけていたが一年のうちにその生命をおえた。また明治四十年には竹内余所次郎を発起人とする「東京複式消費組合」とよばれる組織の設立がくだてられたがこれもまた日の目をみることなくおわった。このほか、平民新聞や直行団のよびかけに応じて東京で二、三の消費組合の設立の動きがあつたようであるが、いずれも設立にいたらず、平民社系の消費組合はことごとく失敗におわった。その失敗の原因は平民社の人々が消費組合の設立にあたつて、労働者・貧民へのよびかけを意図していたにもかかわらず、労働組合が壊滅状態にあつたことも手伝って、実際には平民社に集まる人々のごく周辺の人々にしか影響を及ぼすことができなかったこと、また幸徳や堺などいわば平民社主流の人々が改良運動的色彩の濃厚な消費組合運動に必ずしも熱心ではなく、平民社や直行団自体が思想団体の域を脱するものではなかつたこと、また彼らは零細小売商人への社会主義伝道を熱心によびかけ

ていたから、そのことと消費組合づくりとの関連が明確ではなかったことが考えられる。

そしてしだいにあらわになりはじめた社会主義運動内部におけるサンジカリズムへの傾斜をおびた直接行動派と議会政策派の対立、度重なる弾圧と複雑な人間的葛藤はしだいに安部をはじめとするキリスト教的人道主義の立場にたっていた人々を戦列から遠ざけることになり、消費組合運動もまた消滅していった。

四

しかし安部磯雄の消費組合に対する熱意はそれによって消えてしまったのではなく、その後も幾度か、各地の消費組合の結成に力をかしている。

大正八年十一月、東京神田において結成された「俸給者組合」は信用保障、職業紹介などを行なった一種の共済組織であったが、安部は神戸正雄、北沢新次郎らとともにその顧問に就任した。また大正十五年、東京学生消費組合が早大生を中心に組織されたとき、安部は賀川豊彦や木立義道、松浦武太とともに

積極的に学生たちを指導したばかりでなく、理事に就任している。

安部は終生、社会問題の解決は社会主義にやらなければならぬという信念を、キリスト教的人道主義の見地から空疎なイデオロギーのもてあそびにおちいることを避けて、あくまで現実の社会問題の解決のために尽力しようという立場でつらぬいた。したがって彼の消費組合に賭ける熱意も、消費者がみずからを組織することによって資本主義のもたらす暴利や不当な競争を抑制し、彼らの団結と教育に役立つ限り、かわることなく続いたのであった。

また消費組合そのものに対する理解も石川と同様にさきにみたようにいたずらに政治主義に偏することなく、また経営第一に墮して原則をまげることとせず、厳正な立場で終始したことも注目されてよい。その意味で彼のキリスト教的人道主義に裏つけられた社会問題の解決——資本主義の悪弊除去に賭ける情熱と政治経済学徒としてのきびしい批判精神は消費組合に対する態度にもかわることなくつらぬかれたといえよう。

(昭35大法卒)

同志社時報

第31号

座談会	大学の一般教育……………中桐大有他
	彰栄館の時計と鐘……………加藤 延雄
	同志社文学と明治の翻訳文学……………松村 昌家
人物誌	「山川均」……………山川 菊栄
	危険な被服……………弓削 治
えと文	霧のモンツァ……………森田 康子

随 想・新刊紹介・索引ほか

一部 100円

年6回発行

インド・ネパールの旅

岡田啓一



八月二十日 早朝カルカッタ・ダムダム空港に到着、サービスバスで市内に向う。道の両側にごろ寝しているたくさんインド人、道端の水道管よりわき出る褐色の水で顔をあらったり、口をゆすいでいるやせたインド人、いよいよやって来たのだなと身がひきしまる。

私たち同志社山岳会の第三次ネパール遠征隊（一九六七年）はこうして第一歩をふみだした。翌日、広々としたインド平原を飛び越え、ネパールの首都カトマンズに到着した。

ネパールの旅

「A君。ネパールの山脈を終え、今日十月二十九日カトマンズに帰ってきました。山に關

する報告は前便の通り、もし私たちがこの山をえらぶのなら、同志社の総力を上げて取り組む必要があるでしょう。また農業実情調査もあまりにも貧弱で、私たちの意図した農耕知識の調査など、とてもまとまりません。素朴という言葉がそのまま使えないほど彼らは貧しく、向上しようとする意欲のないのに失望しました。私がこの国にたいして抱いていたイメージは、ヒマラヤ山脈の美しい峯々々とおして持っていた誤ったイメージでした。自然は確かに美しいものです。しかし山と谷の国土、貧しい資源、無知な農民、無気力な知識階級、東西陣営の緩衝国として得る外国援助がこの国の予算の過半をしめている事実、それを頼りにしている政府、この国の将

来はどうなるのでしょうか。残念ながら私には解答が得られません。カトマンズの町には屋間からおしゃれをした若者がブラつき、中にはマニキュアをした者もいる。観光客の真似をして得意がっている。そうかと思うと、ポカラ空港から歩いてわずか三日の部落では集団赤痢をみました。体力のない子供は次々と死に、やがて赤痢は自然に消滅していく、自然淘汰という言葉を使っているのでしょうか。

一つだけ明るい話題があります。私たちの雇った若いシェルパがしきりに日本までの旅費やら、日本の生活費を知りたがるので問い質すと、自分の息子を日本へ留学させたいと答えました。シェルパ族はもともとカーストは低いほうですが、自然に生きる自由の民で、非常に勤勉です。彼らの間から教育の重要性を認識し、次代を担う若者を育てようとする気運を私は心強く思いました。彼らが真にネパールに役立つものを学んでほしいものです。帰りにはインド旅行をするつもりです。ではまた。」

インドの旅

カトマンズを朝のバスで出発する。山と谷

のシュワリーク山脈を越すと、バス道はこんもりと繁ったテライのジャングルを真っすぐのび、やがて広々とした北インド平原に出る。国境の町ラクソールに夕方到着。騒々しい町中に入ると自然に神経がはりつめる。帰路の荷物百五十キロを持ちほこ私たちは、荷物の積み換えのたびに人夫ともめる。終着駅からガンジス河のフェリーボートまで、私たちの荷物をはこんだ人夫が一人頭五ルピー（約二五〇円）請求する。今までの「感」からして「高すぎる」と主張する私たちをまわりのインド人は面白そうにながめている。や々と一人頭二ルピーで話をつけ、まだブツブツ言っている人夫を追い払い、ホッとしたところへ、さきほどから見ていたインド人が「いくら払ったか」と聞く。「一人二ルピー払った」と言うと「それは払いすぎだ。一人五十パイサ（〇・五ルピー）で充分だ」と言う。一日数回しか出ないフェリーの人夫は一日の稼ぎが、せいぜい二ルピーぐらいだろう。私はだました人夫たちより、こうした人夫を上手に使い一等船客で、われ閑せずとお茶を飲んでいる乗客に憤りを感じた。忠告してくれたインド人に精一杯の皮肉を言おうとしたが

言葉が出ない。

雄大なガンジス河を横ぎり船は対岸のビハリー州パトナ市に着く。ここビハリー州は、昨春、飢饉宣言の出されたところである。私たちはここで、インド日本文化協会のシンハ氏に会う。六月に日本の記者が取材に来た時、シンハ氏が案内してまわったとのこと、当時の悲惨な話を聞く。幾日も日照りが続き土地を追われた農民が、このパトナ市に集まり、バタバタと死んでいったこと。アメリカ、ソ連からの救済物資は、まず中央の役人が大部分を掠め、次に地方役人がとり、救済されるべき農民にはほとんど届かなかったこと、こんな事が毎年のように起るのである。

パトナを夜汽車でカルカッタに向かい。朝方カルカッタのハウラー駅に着く。構内には乞食がそこかしこにゴロ寝している。力車や車でごったがえすハウラー橋をわたって市中に入る。チヨリンギー通りに面した公園にはリスや鳥がたくさん遊んでいる。インドは動物天国だ。

カジュラホの遺跡

カルカッタで日本向けの荷物を送りだし、いよいよ汽車の一人旅が始まる。まずヒンズー寺院として有名なカジュラホ遺跡を見に行く。ハウラー駅を再び出発し、アラハバード



カトマンズの寺院

に向う。窓の外はいつまでたっても同じ風景が続く。果てしない平野が続き、ところどころにある水たまりの近くには小さな農村がぐっついており、その附近にはトウモロコシがはえ、やせた牛がむらがっている。

アラハバードで乗換え、翌朝、さらにバスに乗り継いでカジュラホに向かう。

道ゆく女の姿は、赤い腰布をはでにまくり上げ、大きな足環をジャラつかせながら歩いている。そのほそくて長い足と小さく鋭い顔はひどく肉感的だ。カジュラホ寺院は十世紀から十一世紀にかけて作られたという。この官能的な女人像あるいはミトウナはあまりに有名だ。カンカン照りの太陽と魅惑的な女人像に頭がボーッととして一軒のめし屋に入る。

「ここはヴェジタリアン（菜食主義者）の店だ」と坐っていたインド人がおしえてくれる。たまにはそれもよからうと出された野菜カレーを食べる。インド式に手で食べるのも上手になったものだ。「日本人は何んでも食べるのか、肉を食うためには殺生をしなければならぬ。私は生きものを殺すのが嫌いだからヴェジタリアンだ」と小さい声で言う。

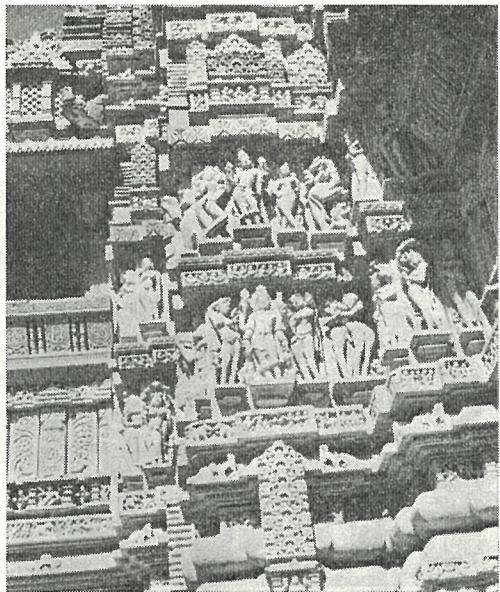
国営観光バスの車掌だ。

帰りのバスは途申何度も検問所でチェックを受ける。バスの車掌が料金をごまかさないうよう作られているらしいが、横柄な役人が乗客一人一人の切符をチェックする融通のなさはおきれるばかりだ。

こんな威張りくさった役人を雇う金のほうが、車掌がごまかす金より多額であるのはわかりきったことだ。

十一月ともなると夜汽車はかなり寒い。西ガーツ山脈の奇怪な岩山を通り抜け、ボンベイに向う。ボンベイは美しい街だ。植民地時代の落ついた街並、流行の先端を行く目抜き通り、しかし裏通りはやはりインドの街だ。

翌日、「インドの門」から船で約二時間のエレファント島のヒンズー教窟を見物する。「シヴァ神はヒマラヤのカイラス山に住む破



カジュラホの遺跡

壊の神だ。破壊とは、すなわち創造である。」岩山をくりぬいた豪快な彫像を見ながら、インド人のどこにこんなエネルギーがあったのだろうかと考える。前に見たタジ・マハール、カジュラホしかり、インドのエネルギーは植民地支配で去勢されたのかもしれない。

ボンベイから更に南下して南インドのマイソールに行ってみる。イギリス植民地軍に最後まで反抗した王国だ。またここはカシミー

ルとともに回教徒が多く、約四〇%をしめる
そうだ。汽車はデカン高原の真中を通りぬけ
る。線路わきには標高を示す標識が立っている。
このあたりは豊かなのか、乞食もあまり見
ない。タクシーを半日雇い、マイソール宮殿
など見てまわる。タクシーの運転手も回教徒
だった。約半日、彼との付き合いは楽しいも
のだったが、さて勘定という時タクシーの料
金のつり銭を出さない。「お前は金持だ、私
は貧しい、金持が貧しいものに恵み与えるの
は当然だ。」幾度となくもめてきたこの旅に
私は疲れきった。「サラーム(御身に幸あれ)」
とお互い言ってわかれる。

十一月二十三日、カルカッタよりA君へ。
「いよいよ帰国の準備です。この短い旅行で
インドを語る資格はもうないでしょう。
貧困、不親切、無気力、インドについての悪
口はいろいろ聞き、本でも読みました。私は
その反対のものを見つけようと努力しまし
た。もちろん、親切な人にも会いました。し
かしこのわずかの事実でこの国の現状をまげ
るわけにはいきません。広大なこの国を救う
のは、ネールやガンジの再来ではありませ
ん。それぞれに自分の生活をまもるに精一杯

の民衆が立ち上がらねば駄目だと思います……
。そういった意味で、最近、西ベンガル州

に起った暴動の際に見せた彼らのエネルギー
を信じたいものです。」
(昭39大経卒)

ただいま休息中

一

でつくく生きる人生をと、私は去年の三月
日本を後に勇躍世界一周へと旅立った。

それから一年たった今、私はデンマークの
コペンハーゲンで働いている。日本を出発し
たときの計画は相棒の中川君(明大卒)と共に
ジープによる世界一周だった。

インドのボンベイに上陸後、順調な走行で
約八ヵ月間二十四ヵ国を見聞し、走行距離は
四万キロ、中近東、欧州は無事走破した。

私はこのデンマークで相棒の中川君と別れ
た。なぜ最初目的を私は中止したのか。一
つには金銭的欠乏、二つにはお互い個性の強

上田 斉 治

い持主である。今後の旅を続けるため後悔の
ない旅——自分自身納得のゆく旅をしたかった
からあえて彼と別れたのである。

今後の計画は南米を自転車で走破すること
であり、世界一周の目的には変りはないが、
私の場合、全体を考えるとこれまでの第一の
旅と、これからの第二の旅に分かれ、その内
容は趣を異にしている。むしろ今後の自転車
の旅に、より以上のファイトを燃やしてい
る。

コペンハーゲンで昨年十二月四日よりレス
トランの血洗いを続けている現在、もう半年
が経ち、その内容は週給三五〇クローネ(約
七、五〇〇円)八時間労働である。そして今

年の八月まで続けると約一、一五〇ドル（四十万円）になる。

自転車は日本より送ってもらい（六月中旬に着く）九月にはいよいよ当地を出発する。

二

私はコペンハーゲンでの生活を通じていろいろの角度から旅の意義について疑問を生じた。楽しくもあり苦しくもあり悲しくもある旅をなぜ若人は自ら進んでやるのか、表面的な意味はわかつているが深く追求するとわからなくなる。だが、六ヶ月間のコペンハーゲンで、私は一つの結論を得た。

旅によって風土や社会を見聞して視野を広め、種々の体験を重ねることも意義のあるところであるが、自分の力をためし自分にうち克ち一つの自信を得ることに意義がある。ただばく然とした、やりたいからやるのでは窮極の結論にはならない。

私は現在に至るまで数多くの旅をして来た。またこれからも続くのだが、このように旅の意義および旅行観を旅の終っていない現在で出すのがおかしいと思う。そこで真の旅について自分なりではあるがはっきりした

考えをもって今後の南米の自転車での旅を有意義にしたいと思っている。それは自分自身を求め、納得ゆくまで追求する旅でありたいと願う。

三十九年度に私は徒歩で六ヶ月間かかって日本の最北端宗谷岬から最南端九州の佐多岬まで踏破した経験がある。このときの旅の目的は他人に出来ぬ「でっかいこと」をしよう、と考えたこと、自分がどれだけやれるかをためす目的で旅をした。この徒歩での収穫は「一つの自信が得られたこと」であった。そしてその自信と自分なりの満足でまたまた世界を見たいという一段上の考えになった。

ジープで順調な旅を続ければ初期の目的を果たすことが出来たのになぜジープから降りてまであえて苦を求めなければならぬのか。

そうだ!! 私は自分自身を一層きびしく見つめ自分を克服せねばならない、と誓っている。住谷総長先生から日本徒歩縦断の時にいただいたメッセージにはこう書いてある「自ら苦を求める若人の意図するところは自らの心身の鍛練もさることながら進んで社会の広くは人類の福祉増進に貢献しようとする所にある」と。この苦を求める手段に私は旅を選

び、青春時代に鍛え上げねばならぬ勇気というものを旅によって見出すのである。何にも頼れぬ、ただ自分自身が頼りの現在、綿密な計画の下、一つ一つ乗り越えるためにも旅についての窮極の結論を見出さざる得ない。

第二の旅―南米を自転車でゆくことの意義は私の生死を賭けてのことである。旅の大きさや小さいということは個人の尺度ではかり切れるものではない。私は私なりに考え、あえて他人に押しつけたりはしない。また、出来るものではない。私は常に私の道を行く、そして素朴な旅をしたいと願う。

旅によって将来の社会人として役立つ、旅によって利益が得られる結果に終りたくない。あくまでも素朴に生き、自然を愛する真の旅人になりたい。常に自分を厳しく見つめることにより、旅して言うに言われぬ、また金では買えぬ何ものかが身につくと思う。そして私の旅とは何か、なぜ旅をするのかの結論は「自分を満足させるための一手段である」ということであり、自転車で今後の旅を完遂した後でもこの結論は変らないだろう。

三



ロンドンにて（向って左が上田君）

前半の旅での強烈な印象は去年の六月五日のアラブとイスラエルの戦争の時だ。私たちは強行で突破したためヨルダンのマフラーでイスラエルのジェット爆撃機四機に機銃掃射され、なぜか私たちのジープ一台のみ無事で他のトラック三台、ジープ二台は爆破された。ほうほうの体でその場を逃げたが、五メートル横を機関銃の掃射である。私たちに与っては生れて初めてのこと、その怖ろしさは今もって忘れられない。これで一度私は死んでいる身である。ヨルダン、シリアの行程で

憲兵隊に何度もつかまり、野宿していると、三人の兵隊が銃をつきつけまきに敵視、われらは日本人であると一生懸命の説明、説得が実のり一応無事に終ったが、ある一般市民がナイフを私の首、胸におしつけ、お前はアメリカ人か、どっちだと詰問した。戦時中の彼らの顔は冗談とかフザケているというなまぬるいものではない。真剣そのもので、そこには人を人とみなさない何ものかがあり「私は日本人だ。アメリカはノー・グッドだ」というと一応ナイフをはずしてくれた。

もしアメリカカーノであれば殺すと言った。シリアを四十八時間以内に出不なければならず、尋問中早く時間が過ぎてほしいと思った。

今から考えると怖ろしくもありこわくもあったアラブが懐かしく、そのような刺激を得た私にとって、ヨーロッパの国々には平和は見られるが一面なまぬるい感じがする。

また、盗難の方もご多聞にめれず紳士の国、イギリスで

カメラ、ラジオ、衣類の金目の物をこっそりやられ、くやし涙が出た。ユースホステルの前に駐車しておいたのだが、これは旅行者の仕業と考える。旅人が物を盗まれるのは同じ旅人がやるが多く、コペンハーゲンのユースホステルなど連日のように盗まれていく。全く言語断である。

私はスペインで闘牛を見てのその夜、あの手に汗にぎる迫力にその日は頭に血がのぼったとも言おうか、スペインの居酒屋で一杯やっているときにささいなことからケンカになり、腕に自信のある私は路上で二人を相手にボカボカとやったが、そのうち大集団にかわり、まるで私が闘牛のようになって袋だたきにされ、一命をあやうく失うところだった。やっぱり血の気の多い情熱の国、私はこの国がなぜか好きだ。

目下、弟の昌平（同大法・四回生）が休学して日本より五月二日にこのコペンハーゲンに到着、共に働き、共に自転車旅をする計画をしている。

（昭40大法卒）

うだつがあがる家

銅 木 路 易

1

「うだつがあがらない」という俗語がある。その意味を、ともにある角川の国語辞典で見ると、そこには

1 一人前にならない。

2 思うぞんぶん活躍できない。

と二通りの説明が書いてある。こうした二通りの意味が生じたのは、もともと「うだつ」に二通りの意味があるからだと思はしう。今度は、共立出版の建築辞典で調べて見ると、「うだつ」は「うだち（税）」の転化で、

A はり、上などにある短柱（つか・束）の称・宇太知なども書く。

B 切妻の民家などの両妻に設けた土壁の一種で屋根面より高く出ることあり、防火的な意味をもつ・卯建などとも書く。と、二通りの意味が書いてある。

それで、Aの意味から、宇太知は棟木にそ

2

の頭をおさえつけられているので2の方の意味が生じ、また、Bの意味から、昔は一人前にならないと卯建が屋根面より高く出た家に住めなかったので1の方の意味が生じたのであろう。そして「うだつがあがらない」という言葉は、Bから生じた1の方が、その本来の意味であったのではないかと思われる。

これから私が書くのは、Bから1の方、すなわち、卯建が上る家のことである。

3

目にかかった近藤豊先生（同志社中学出身・大阪学芸大助教授・建築史）にお見せした。その中の一枚に勝山の写真があった。平泉寺を見学するため、勝山でバス待ちをした時の写真である。そこには郵便局長の家が写っていたが、近藤先生がそれを指さしながら、「この家はうだつがあがっています。勝山にもこんな家が残っているんですね」といわれた。それが、私に「うだつがあがる家」の知識をあたえられた最初である。

＊この時、平泉寺では、戦後、追放の身を故郷に休めておられた平泉澄博士に親しく話をうかがうことができた。

「うだつがあがる家」は、戦国時代頃から、奈良を中心に各地にひろまっていったようである。（だから、蛇足になるが、それ以前の時代では、「うだつ」といえば、和名抄によるまでもなく、宇太知の方の意味しかなかったわけである。）

では、どうして「うだつ」はあげられるようになったのであろうか。ふつうは防火のためといわれている。前記の建築辞典でもその

ように書いてある。事実、「うだつがあがる家」といえば、ほとんどが町屋である。軒と軒を接した町に見られるのである。類焼を防ぐのになりの効果があつたのだらう。大東亜戦争中にも、空襲による防火のため、こうした「うだつ」類似のものがつくられ、現在でも、京都や大阪に多く残っている。

しかし、これには、ちがった説もあり、たとえば、伊藤ていじ氏は「民家は生きていた」(美術出版社)という本の中で、のちには防火のためにつくられたとしても、その起原は、妻の屋根のハナが弱く風でまきあげられやすいが、かといって、破風板などがまだ町屋などで使われなかつたので、それを防ぐために「うだつ」をあげた、と説明しておられる。

そして、その起原はともかく、よほどの家でなければ、こうした家に住まなかつたので、「うだつがあがらない」という言葉が生じたのである。

4

江戸時代に入ると、京や江戸をはじめとする町々に、「うだつがあがる家」が群出する。それらは、各所の「名所図会」類によつてし

られる。

しかし、明治になってからは、減る一方で、もう新しく「うだつ」をあげるようなことはしなくなつたようである。その現存する分布状況は、私の見てまわつたところでは、つぎのようである。

ただし、いくら私が旅行が好きだといって、



滋賀県今津町の民家

見ていないところも多いから、まだまだ、こうした家はあるかもしれない。また、京都市内だけでも、次々と消えていくから、これを書いてある時点では、もうすでに消滅してしまつたものもあるかもしれない。

それから、ふつうは町屋が多いので、明記してある場合以外はすべて町屋と思つていただきたい。

5

関東地方以北には、ほとんど見られない。東京も、江戸とよばれていた頃は多かつたと思われるが、相つぐ震災・戦災で全滅したようである。安中に一軒ある。町の本通りに面した北側にある。

中部地方に移る。南部では、名古屋に一軒残る。徳川美術館の近くである。中部では、松本にも一軒ある。駅から松本城に行く途中で、これは立派なものである。野尻の近くに、旧本陣の中村氏の家がある。この家のおもやが、「うだつ」をあげている。余談であるが、中村氏の家の近くに一里塚が残っているが、これは道の両側に完全に残っている珍らしいものである。

中津川へ来ると、ここでは、町の東郊に三軒ばかりがかたまつて「うだつ」をあげている。岐阜の奥に北方という町がある。この町は、鎌倉時代の傑作で名高い重文の楼門その他の重文彫刻を有する円鏡寺のある町であるが、ここに三軒ばかり、「うだつ」がある家が並んでいる。

中部地方の北部では福井県に見られる。前記の勝山に一軒。今庄に一軒。ずっと西に進んで、海水浴で皆さんご承知の高浜になると、ここはまた驚くほど多い町ではある。

6

近畿地方では滋賀県が多い。米原に一軒。これは、米原という姓の葉屋さんの家である。彦根と近江八幡は実に多い。軒なみに並んでいる姿は壮観である。草津では旧本陣・現公民館の門に「うだつ」があがる。大津では、とくに三井寺下に「うだつ」があがる家が多い。今津にも残っている。

京都府では宮津に多い。天ノ橋立から船で宮津にあり、町にぶらぶら入っていくところに点々と見られる。

京都市は多いこと日本一であろう。北では

鞍馬。門前の店々に「うだつ」をあげている。

東では、古川町の京阪電車の大津線沿い。南では、もと、東福寺の近くと、丹波橋の京町通りに各一軒あり、京阪電車で香里に通う私の目を楽しませてくれたが、両方とも今はない。西では、仁和寺街道の西大路の東方にかなり見られる。この近くにある有名な菅氏の家も、その長屋門は「うだつ」をあげる。中央部では西陣に多い。南北すじでは、大宮通り今出川上ったところ。ここはだいぶん減つた。智恵光院通りでは、今出川付近。中立売下るの家は改築で消滅。出水の角にある酒造りの家は立派なものである。東西通りでは、今出川通り智恵光院西にあったが今はない。元誓願通りは大宮以西に多い。中立売通りでは大宮以西に三軒ある。西陣以外では、榎木町通り堀川東入るに、わかりにくいが一軒残る。すっぱん料理で名高い「大市」も「うだつ」をあげている。四条通り烏丸西入る、現在備前屋ビルになる所に、もと、一軒「うだつ」をあげていた。

奈良県では、町屋ではないが、大和棟といわれる農家が「うだつ」をあげる。しかし、これは蔵田周忠氏の「民家帖」などによれば、

「たかへ（高堀）」と呼ぶ方がいらしい。兵庫県では播但線に沿う竹田に多い。

近畿地方を終ると、これより西はもう「うだつ」がある家は見られないようである。

7

文中で、「今は見られない」とか「消滅した」という言葉で表現したように、年々「うだつ」がある家は減少していく。ふえることはないわけであるから、そのうち全滅してしまうかもしれない。その頃には、「うだつ」があらぬ」という言葉も口にされないようになるかもしれない。長々と書いてきたこの一文も、あるいは、滅びゆくものの「墓碑銘」となってしまうかもしれない。それが世のならいだとしても、一沫の淋しさを禁じえない。といったところで、終りはいささかしめづらくなつてきたので、このへんで筆を止めよう。

(香里中高校教諭・社会)

*

*